

けんぼんちゃくしょくふじまんだらず

1 富士山本宮浅間大社所蔵「絹本著色富士曼荼羅図」

絹本著色富士曼荼羅図は、富士山へ人々が参詣する過程を描いたもので、中世の富士登山信仰の中心となった大宮・村山口（現在の富士宮口登山道）からの景観が描かれています。下部に駿河湾、三保松原、清見寺、中央に富士山本宮浅間大社があり、富士山の山頂は三峰に描かれ、下から上へと聖域性が増す構造となっています。右下隅にある壺型朱印は室町時代の絵師である狩野元信のもので、16世紀前半の作品と考えられています。1977年（昭和52）に国の重要文化財に指定されました。

この曼荼羅図から、三保松原は富士山へ参詣する過程を表す重要な霊地として認識されていたことがわかります。富士山と三保松原の目に見えない繋がりを示す重要な作品です。

みほしるべでは貴重な原寸大レプリカを展示しています。

①三尊（左から薬師如来、阿弥陀如来、大日如来）
※周りには散花が舞い浄土の世界が表現されている

③室で白装束に着替えた参詣者



⑤女性の参詣者
※劔王子（つるぎおうじ）手前までしか登場しないため、女性が来ることができたのはここまでだったことがわかる。



↑女性達

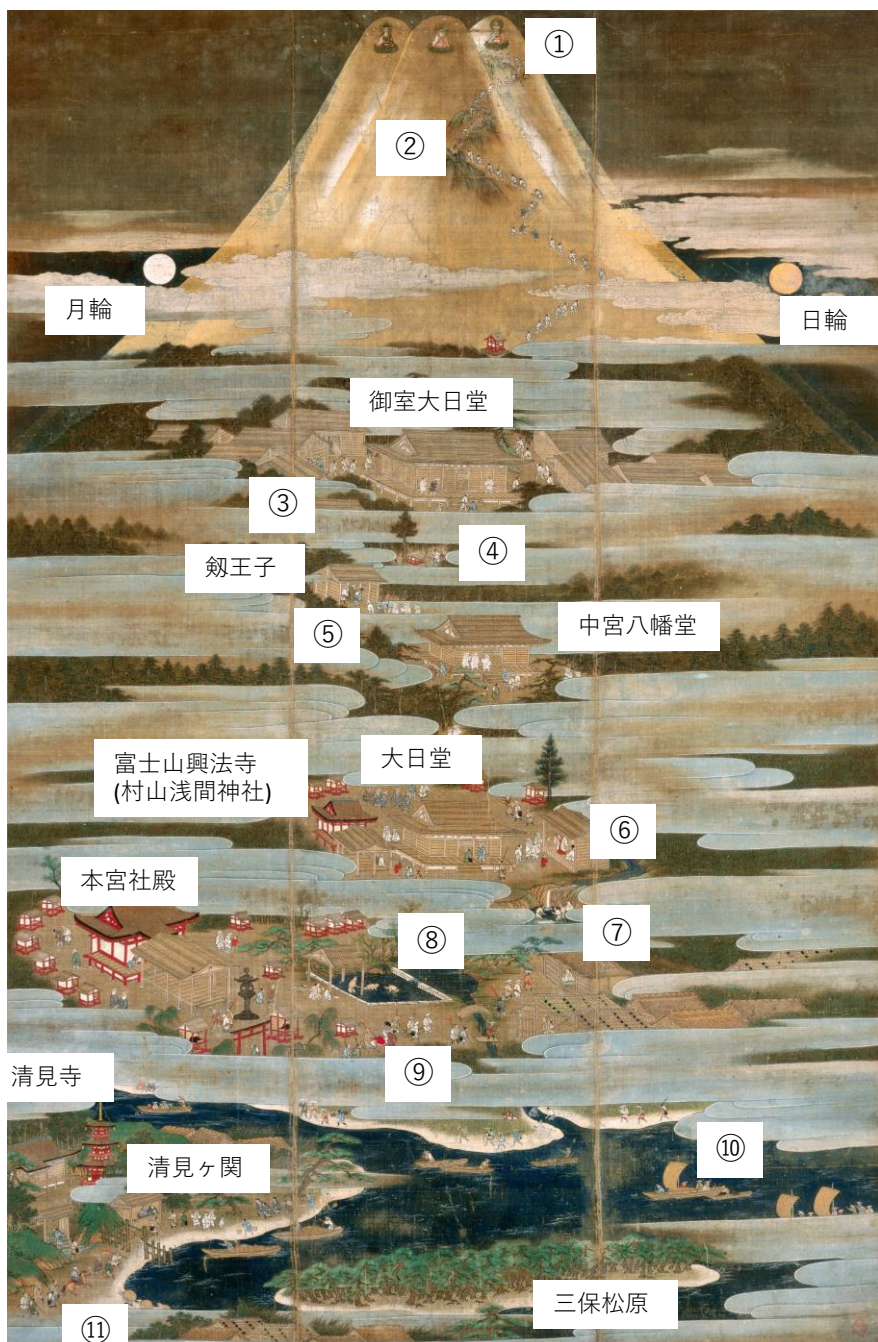
⑧湧玉池で身を清める人
わくたまいけ



⑨流鏑馬神事の人々
やぶさめじんじ



⑪馬に乗った参詣者



②松明を持ち登山する参詣者

④矢立杉をする人
※杉に矢を射立てて祈願すること



⑥拝殿で舞う巫女



⑦竜頭滝で身を清める人



⑩船に乗った参詣者と茶を売る人



←朱印

2 能「羽衣」が伝える三保松原の羽衣伝説について

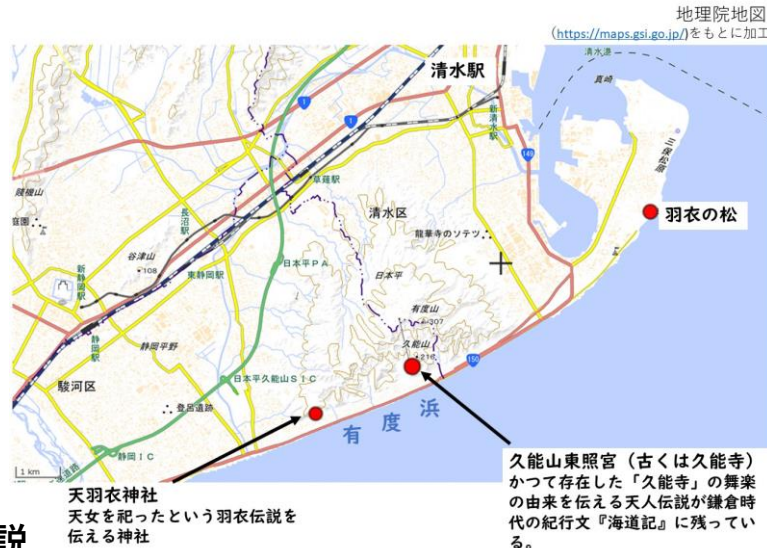
(1) 物語の成立

能「羽衣」は、漁が終わり三保松原に上がった漁師白龍が、松に掛かっている羽衣を見つけ持ち帰ろうとするも、現れた天女の嘆き悲しむ姿を見て舞を見せてもらうことを条件に羽衣を返し、天女は三保松原の美しい景観を背景に舞を舞いながら天に帰るといいう物語です。（みほしるべパンフレット「羽衣伝説」の頁をご覧ください。）室町後期以降、頻繁に上演され、「羽衣伝説といえば三保松原」というイメージを広げた要因となりました。

能「羽衣」が伝える三保松原の羽衣伝説は、各地に存在する羽衣伝説と比べ非常に珍しい物語になっています。羽衣を奪ったその土地の者と結婚し生活していく展開が多い中、三保では天女と出会い別れるまでたった1日の出来事として描かれています。能「羽衣」が作られた頃に、すでにこの物語のような羽衣伝説が広まっていたのか定かではありません。しかし、三保松原は古来より歌枕として和歌に詠まれる景勝地でした。そして、平安時代には三保からほど近い有度浜で天人が舞った舞がもとと伝わる東遊びの駿河舞が都で上演されるようになり、三保松原の周辺は天人伝説の舞台として知られていました。能「羽衣」は、三保松原と富士山の美しい景観を背景に、駿河舞による天女のイメージや、地域に伝わる羽衣伝説などの要素が風景と共に人の心の清らかさに結びつき、このような物語が作られたのではないかと考えられます。



天女が羽衣を掛けたと伝わる羽衣の松（現在は3代目）。御穂神社の神事の際、海の彼方から来臨する神様の憑代（よりしろ）でもある。



(2) 三保の地域周辺に伝わる羽衣伝説

① 鎌倉時代の紀行文『海道記』

久能山にあった大寺院である久能寺の舞楽の由来として、天人伝説が記されています。稲河大夫という人が、三保松原から約10km西の有度浜の松の下で、天人が舞っているのを見て舞を学ぼうとした話です。この伝説では、天人は見られていることに気づくと鳥のように飛び立ち、雲に隠れてしまいます。

② 江戸時代の『本朝神社考』

林羅山の著作である『本朝神社考』では『駿河国風土記』を引用し三保松原の羽衣伝説が記されています。天女は天に帰れず漁師と夫婦になるも、その後羽衣を取り返して天に帰り、漁師もまた天に昇り仙人となったという物語です。

③ 中平松の天羽衣神社

有度浜よりも西に位置する現在の駿河区中平松に現存する「天羽衣神社」に、天女を氏神として祀ったという伝説が伝わっています。天女は羽衣を持ち帰った男の家に住み込んだ後に羽衣を取り返し、自分を氏神として祀れば永久に村を守ると誓い天に帰るといいう物語です。

3 羽衣の碑（エレーヌ・ジュグラリスの碑）について

（1）エレーヌ・ジュグラリスとは



エレーヌ・ジュグラリス(32歳)
静岡市所蔵

エレーヌ・ジュグラリスは、1916年（大正5）4月23日、フランスのブルターニュ地方カンペールに生まれました。幼少期にモダンダンスの祖イサドラ・ダンカンに師事し、その後シャルル・デュランと共に演劇を学んだ舞踊家です。日本の能に巡り合い、世界で最もシンプルで完璧な演劇であることに心を打たれ、1941年（昭和16）頃から能楽と日本文化の研究に精力を注ぎました。第二次世界大戦中のフランスでの独学による研究は非常に困難でした。しかし、日本研究者であり翻訳者のルノンドと外交官のジョルジュ・ボンマルシャンに出会い、能に関する資料を可能な限り収集し、謡曲「羽衣」の忠実な翻訳を完成させました。1949年（昭和24）の初め、シャンゼリゼの劇場で能「羽衣」の初上演を行いました。この舞台を見た東洋学者ルネ・グルセの招きで同年3月28日にパリのギメ美術館での上演を成功させました。



エレーヌの舞い姿
静岡市所蔵

公演はル・モンド紙、フランス通信社などの各紙が大きく報じ批評家の称賛を受けました。しかし同年6月、公演中に倒れ、白血病であることがわかりました。病床で「羽衣の物語の舞台である三保へ、ぜひ一度行って欲しい」と夫に言い残し、1951年（昭和26）7月11日に35歳という若さで亡くなりました。

（2）「羽衣の碑」の建立

パリの経済月刊誌の特派員として来日した夫のマルセル・ジュグラリスは、1951年（昭和26）11月11日に、エレーヌが憧れた地である三保松原を訪れました。エレーヌのことを聞いた人々は、敗戦し傷つき自信を失っていた中、日本の伝統芸能を愛し生涯を捧げたフランス人女性がいた話を知り心を打たれました。多くの市民からの寄付金と市費30万円によって三保松原内に記念碑が建立され、1952年（昭和27）11月1日に除幕式が行われました。

式には、市長、県知事、フランス大使など多数の来賓が出席し、三保松原に作られた仮設舞台で梅若万三郎一門による「羽衣」が上演されました。この野外上演は、現在「三保羽衣薪能」として受け継がれ、毎年10月にエレーヌを偲んで上演されています。

記念碑は、彫刻家の朝倉文夫の娘である朝倉響子がレリーフを製作し、「羽衣の碑」の題字は書家の高塚竹堂が揮毫しました。碑には、エレーヌの遺髪が納められ、夫マルセルが贈った詩がフランス語で刻まれています。



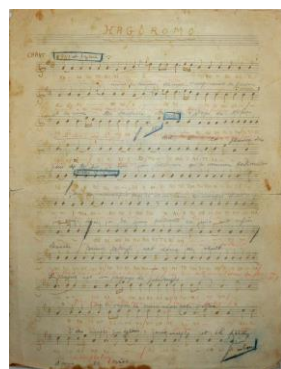
羽衣の碑

（3）遺品の寄贈

エレーヌが能公演で使用していた能面、扇、写真等は、1991年（平成3）に旧清水市に寄贈され、清水中央図書館で展示された後、現在は静岡市三保松原文化創造センターで保管、一部展示されています。



エレーヌが使用していた能面（修復前）と扇



4 羽衣まつり（三保羽衣薪能）について

（１）羽衣まつりとは

羽衣まつりは、1984年（昭和59）に旧清水市の「イベント清水170」事業のひとつとして企画され、「フランスフェア羽衣まつり」として始まりました。以後「イベント清水」事業として展開しています。

パリで能「羽衣」を上演した舞踊家エレーヌ・ジュグラリス夫人を顕彰し、彼女に捧げる羽衣薪能の他、祖国のフランス文化を紹介する文化講演会や名画祭、羽衣伝説を理解し伝承していくための諸事業を開催し、文化事業のひとつとして定着しています。

以来、長い年月を経て形は少しずつ変わってはありますが、現在も、エレーヌ夫人の顕彰や伝統文化継承の目的は変わらず、「三保羽衣薪能」を中心とした事業を開催しています。

（２）事業紹介

①伯良行列

羽衣伝説に登場する漁師・伯良に扮し、縁のある伯良神社で薪能の種火を採火し、地元の自治会や子ども会の皆様が行列を組み、羽衣まつり会場内の羽車神社まで送ります。

②エレーヌ夫人顕彰式

能「羽衣」の上演に情熱を捧げ、三保に思いを馳せながら若くしてこの世を去ったエレーヌ・ジュグラリス夫人を顕彰し、地元保存会による舞楽「羽衣の舞」の奉納や羽衣の碑への献花等が行われます。

③三保こども能楽

「能楽」をとおして、日本の伝統文化を学ぶ静岡市立清水第五中学校の生徒達が、日頃の学習の成果として、特設能舞台にて素謡や仕舞を披露します。

④三保羽衣薪能

羽衣伝説発祥の地で、ゆかりの演目「羽衣」などを上演する日本随一の薪能です。

これまで「羽衣の松」の脇に特設能舞台を設営しておりましたが、令和3年度より、舞台を「みほしるべ」前広場に移してリニューアル開催します。

<令和3年度開催予定>

開催予定日：令和3年10月23日（土）

会場：静岡市三保松原文化創造センター「みほしるべ」前広場
（雨天時 清水文化会館マリナート）

《過去上演された演目》

・能「羽衣」※毎年上演
「小袖曾我」「船弁慶」「善界」
「富士山」「清経」「熊坂」 ほか

・狂言「仏師」「成上り」「蝸牛」「棒縛」
「佐渡狐」「口真似」「樋の酒」
ほか

※過去の演目・演者は静岡市HPに掲載しています。また、静岡市のYouTubeチャンネルでは羽衣まつりの様子をご覧ください。

